



# 多賀城から太宰府へ 私たちが伝えられること

多賀城市の復興のために現在も支援してくれている友好都市太宰府市。2015年3月22日、太宰府市で開催された「ママたちの底力!小さな復興が街を変えた(主催:CLOVERS MUSIC)」にて、多賀城のママたちが被災体験を語りました。

食べ物やガソリンが手に入らなかったけど、普段の近所付き合いを生かしてお店の情報を交換した

イベントが自粛され、まちに元気がなくなっていた。多賀城を元気づけるイベントが必要だと感じた

「離れた場所の出来事だと思っていた方も、私たちの体験を直接聴くことで自分のことに置き換えて震災を考えてくれた」とリーダーの佐藤真紀子さんは参加者の意識の変化を感じたそうです。生活者の視点での生の声は、場合によっては報道以上に人の心に残ります。みんなそれぞれ少しずつ違った経験をしています。その経験を自ら伝えていくことで、伝えられた人の防災意識が高まったり、新たな視点や知識を得たりします。こうした人から人へのつながりが、よりよい地域・社会を育てていくのではないのでしょうか。

まずは「tag」から!  
・ブログなどで自身の経験を発信する  
・震災を語るイベントに参加する

詳細は「tag」から!  
Love tagajo プロジェクト太宰府へ  
2015年4月23日(木)掲載



九州国立博物館にて震災時の生活や活動を太宰府の方々へ伝えました

「Love tagajo プロジェクト」とは震災後、多賀城のママたちが中心となり、多賀城に元気を取り戻そうと立ち上がった団体。マルシェやコンサートを開催し、まちに活気をもたらしました。今回の講演は、太宰府市の復興支援ボランティア「CLOVERS MUSIC」と協力して、2011年に多賀城市内でコンサートを開催したことがきっかけで実現しました。



中心メンバーの庄司美穂さん

リーダー的存在、佐藤真紀子さん

## Love tagajo プロジェクト

### ヒント from “たがさぽPress” たがさぽのブログから地域づくりに役立つ記事をご紹介します

詳しくはブログへ <http://blog.canpan.info/tagasapo/>

🗨️ **ご当地食器でご当地食材を楽しむ。** 2015年3月12日(木)掲載  
日本各地に伝わる伝統的な和食器とご当地グルメをコラボレーションさせることで、和食器を身近なものと感じてもらおう活動をご紹介します。

🗨️ **歩いて話して地域の謎解き** 2015年3月5日(木)掲載  
青森県黒石市の「ブラックストーン謎を解け!」。楽しみながら地元の歴史や魅力を知るとともに、商店街の活性化を目指して実施されています。

🗨️ **DASUフェスでスッカリ** 2015年3月1日(日)掲載  
仙台・多賀城・塩釜エリアで地域福祉に携わっている人たちのグループ「夜考虫。」が主催のイベント。「DASU」の意味するところとは?

### “たがさぽPress”とは?

たがさぽスタッフによるブログ。興味が湧いたらたがさぽPressへ! \*ケータイ、スマホからご覧いただけます。



### たがさぽからのお知らせ たがさぽが企画する「一歩ふみだすきっかけ」をご紹介します

## たがさぽ文庫のご案内

たがさぽの図書貸し出しスペース「たがさぽ文庫」に新しい本たちがやってきました。何かはじめたいと思っている人には一歩ふみだすきっかけを、すでに活動している人にとっては新しい視点や活動のヒントを与えてくれるので、ぜひご覧ください。

- いまあなたにできる50のこと
- NPOの教科書
- 町内会は義務ですか?
- まちライブラリーのつくりかた
- ゆっくりやさしく社会を変えよう
- 戦争を取材する
- コミュニティFMの可能性

# 外国人も安心! 多言語防災マップづくりしました

多賀城市国際交流協会ジュニア部の子どもたちが、協会に所属する外国人の方々とともに防災マップを作成しました。これは、小学校4年生以上の子どもたちの防災意識と国際感覚を高めるための取り組み。今回は、マップづくりから多様な人が安心して暮らせる地域を考えます。

## 震災で見た外国人の困りごと

多賀城には、アメリカ、イギリス、中国、韓国、ロシア、ドイツ、スリランカ・・・20カ国以上の方が住んでいます。しかし、震災時、外国人にはさまざまな困りごとが生まれました。

- ✓ 避難する際に防災マップや避難指示が分からなかった。
- ✓ 外国人の自分が支援物資をもらっているのか分からなかった。
- ✓ 慣れない日本語のために、義援金受取書類の作成や仮設住宅入居手続きが難しかった。
- ✓ 大使館の命令で帰国された方も多く、これまでの外国人のコミュニティが崩れた。
- ✓ 母国語で話せる方がまわりにいないことでの不安から体調を崩した。



多賀城市国際交流協会の会員たちは、こうした外国人の困りごとに対し個人単位で支援を行っていました。

## それぞれの目線で作る防災マップ

言語や文化が異なる外国人の困りごとが浮き彫りになり、協会では外国人をはじめとした多様な視点が盛り込まれた防災マップをつくってみようということになりました。作成には子どもたちも参加しましたが、大人は避難経路を車道を中心に考えていたところ、子どもたちは通学路や歩道を中心に考えていたので、車では通れない避難所への近道をよく知っていました。

また、多賀城に住む外国人の力を借り、英語・中国語・韓国語の表記もしてあります。あるコロンビア人から、英語や漢字のマップは難しいが、ローマ字で書いてあれば読みやすいとの意見があり、より多くの国の方が活用できるようにローマ字表記や目で分かる写真なども加えていく予定です。

現在、マップは市のホームページで英語版のみ閲覧でき、市内の公共施設にも随時配架予定です。今後は、もっとたくさんの人たちに関心をもってもらい、それぞれの視点で意見を出してほしいと考えているそうです。

## 地域づくりに多様な意見を取り入れる

地域社会では、子ども、外国人、高齢者、障がい者など、立場によって災害時や普段の生活で感じる困りごとが違ってきます。地域の防災を考えるには、自分が感じたことももちろんですが、自分とは違った立場の方にもお話を聞いてみてはいかがでしょうか。さまざまな意見が反映されることで、より多くの人にとって住みやすい地域がつけられます。



子どもならではの視点も反映されています



多賀城市国際交流協会ジュニア部のみなさん

みんなの声で  
パワーアップ  
していくといいね!

